

『奥の細道』小見 (五)

板 坂 元

十二、眼前に

むかしよりよみ置る歌枕おほく語伝ふといへとも山崩川
流て跡あらたまり石は埋て土にかくれ木は老て若木にか
はれは時移り代変して其跡たしかならぬ事のみを爰に至
りて疑なき千歳の記念今眼前に古人の心を闕す

壺の碑での感激を綴つた一節であるが、「眼前に」とい
語について少しつけ加えておきたい。この語は字義通りに
「まのあたり」にか「目前に」とか口語訳されており、そ
れでさしつかえないかにも思われるが、現代の人々がこの語
についていさぐ意味と元祿の当時とは少しへだたりがある
ような気がする。そのひとつは『日葡辞書』等によつて、当
時「眼前なり」という形容動詞もあり、「明瞭に」は「つきり」と
というような意味があつたらしいことである。もちろん、こ

ういう資料にすぐに飛びついて、訳語をかえる必要は毫もな
い。だが、少くとも今日の我々が使っている即物的な意味で
の「眼前に」という訳語（註釈書類を調べたところさういう
傾向が強いかに見える。たゞし「まのあたりに」という語に
は感慨をこめた云い方が感じられなくもない。）に対して、右
のような抽象的な意味内容を加味して理解する必要はないと
は云えない。「眼の前に」というような直訳調よりも「ありあ
り」とか「如実に」とでもした方が芭蕉の気持には近いの
ではあるまいかと私は思っている。

つきにこの「眼前に」の語は、中村幸彦氏のお説によれば
（同氏御直話）、西鶴には「あの世」「彼岸」といつた語に対す
るものとして「この世」「現世」といつた意味を持つていて
いうことである。（私に示された例はことごとくさういう意
味であつたかに記憶する）これは西鶴だけがさういう意味に

使つたのではなく、そういう仏教的な世界観を背景として「眼前に」の語があつたことを示すのではあるまいかと思われる。だとすると、元祿時代の人々の使う「眼前に」という語は葬式以外にはほとんど仏教に関心をいだかない近代の人々とはかなりちがつた使い方をされていたといえるようである。謡曲「鶉飼」に「それ地獄遠きにあらず、眼前の境界」という個所があるがやはり右のような用例である時、「明瞭に」等の意味と、仏教的な意味とがどのように関連するのかが、詳らかにしないが、芭蕉等の用いた「眼前に」という語にはこういうニュアンスがあつたことを見逃してはならない。

些末な問題であるが、註釈というものの関心が、わからない語（即ち現在使われていないかあるいは、現在使われている意味では本文が理解できないような語）に重点を置かれていたために、現代に行われていてその用法でも意味が通じる場合には、今昔のわずかな意味の変遷を看過しやすすい、その一つの例として「眼前に」という語をとり上げて見た。

註「鹽涙の石碑も遠きにあらず」の個所の「遠きにあらず」の語句は、こんな詞章から芭蕉等の耳には熟していたのであろうか。

十三、翠桃の一資料

黒羽に十数日滞在した芭蕉を「朝夕勤とふらひ、自の家にも伴ひて」款待いたらぬところのなかつた翠桃（奥の細道で

は「桃翠」となつてゐるが、曾良の『日記』などに見えるように「翠桃」であらう）についての連句資料を紹介しておきたい。

貞亨五年（元祿元年）の年頭に成つた嵐雪の「若水」にある三歌仙に翠桃が連衆の一人に加つてゐることは周知のことであるが（雑誌「ひむろ」一四九号・池上義雄「嵐雪若水」中の歌仙）、同誌一六一号・山崎喜好「嵐雪の『若水』写本」同誌一七五号・殿田良作「三たび嵐雪の『若水』に就て」の三氏の御研究による）、連衆の顔ぶれとその順序を左に列挙しておく。「若水に智恵の鏡を磨うよや」の嵐雪の発句につゞく一巻——嵐雪・露荷・李卜・北鯤・濁子・嵐水・トチ・当哥・野馬・ちり・如泥・友五・水萍・泥芹・山居・荷来・蚊足・嵐雪・曾良・嵐泉・西北・嵐痒・夕菊・翠桃・嵐竹・濁子・嵐蘭・李卜・露荷・儂子・其角・ト宅・北鯤・嵐萩・嵐蘭・蚊足。「恋ゆえや四十おとこも若をひす」の李萍の句を発句とする一巻——李卜・嵐雪・露荷・嵐蘭・北鯤・蚊足・ト宅・嵐泉・友五・ちり・嵐水・野馬・嵐雪・依之・嵐痒・李卜・濁子・当哥・曾良・如泥・蚊足・翠桃・山居・露荷・苔翠・水萍・嵐竹・北鯤・夕菊・嵐家・泥芹・西北・嵐蘭・濁子・トチ・其角。「年若しいて何某も弓とらん」の露荷の発句につゞく一巻——露荷・李卜・嵐雪・濁子・友五・トチ・嵐水・如泥・野馬・曾良・嵐蘭・蚊足・嵐泉・嵐痒・蚊足・山居・北鯤・当哥・翠桃・苔翠・泥竹・依之・水萍・ト宅・其角

・夕菊・嵐竹・西北・ちり・嵐雪（以下挙句まで嵐雪がつけ
 ついでいる）。以上の三歌仙のうち「季下」は山崎氏所見の写
 本では「季下」になつてゐる由、その方が正しいかと思ふ。
 さてこれらの各々に翠桃が一句ずつ付句を見させてゐるのは見
 た通りであるが、ここに紹介する四十四の一卷は連衆が「若
 水」のそれとほとんど一致するので、おそらくその年のもの
 ではないかと思われるものである。架蔵のこの卷子本は、写
 しが新しく誤読誤写と思われる部分も少くない。だが、他日
 さらによい写本の出現するまではこれによる外はない。以下
 にその全部を翻写して見よう。「若水」の例でもわかること
 だが、「奥の細道」の旅の前年春、翠桃は江戸にあつて蕉門
 の俳人達との交渉があり、曾良とも面識の間柄であつた。翌
 年夏、芭蕉を迎えて、翠桃は、こういつた俳諧の新しい流れ
 の中で「きわ光芒」を放つてゐる師に会い得た喜びに胸を躍ら
 せたことであろう。奥の細道に描かれた彼の姿はそれを如実
 に示しているようである。

一 嵐音吹かへよ門の松
 筆ころむる去年の灯
 浮水尾の霞のみけしほのめきて
 実へうへらる菌の橘
 蟬の音を皮ぬく竹に聞初る
 菅笠うりのすくる村雨

嵐雪
 蚊足
 嵐
 杉風
 濁子
 北鯤

川舟の垢かへつくす夕月夜
 麦つく秋の寐くるしき宿
 誰ゆへに祐のとの子と名は立て
 ちきりめつらし七夕の昼

楽人の錦たちぬふ日なるへし
 住連をうらぬる賀茂の家々
 車をくかたへは樽咲にける
 鞠にはにくき夕立の雲
 養虫の骸は箒の塵となる
 瓢の水をむすふ明ほの
 夢もなき木曾の泊のいそかしく
 夏火燧より秋になりけり
 長月もあはれにくれて晦日の
 わたきて疲る草そかわゆき
 色はへて嵐の雪の花と咲
 筆ころむる去年の灯

僧正もかちの若水汲ためて
 朝日まつさす白鷺のはね
 涼しけにむすへる峯の庵哉
 わらちひとつをもとめ兼たる
 世中を楽におくるもとかしく
 両用さする森の下道
 松茸のやつれしすかた杖つきて

嵐竹
 一山
 仙化
 翠桃
 其角
 執筆
 富峯
 全峯
 嵐水
 萩風
 北鯤
 嵐雪
 釣雪
 北鯤
 杉風
 嵐水
 其角
 ソラ
 孤屋
 蚊足
 仙化
 北鯤
 嵐蘭

鳴聞に明る奥のやま川

嵐雪

綱代とて柘木を運ふ秋の暮

杉風

茶の覆漏る月そやさしき

濁子

陸奥の礎はいつをさかりなる

孤屋

馬みな売て笠破れけり

全峯

戸たゞけは女あるしの立出る

ソラ

つゝら切さく絹の薫

其角

箱根山ふたりか中の闇路にて

而已

子の佛のさめてうつゝか

仙化

石仏あられもあらぬ繩をかけ

釣雪

雨の夜更き庚申の塚

北鯤

何鳥も鳴ねは聞ぬ空なれや

嵐蘭

うか／＼ふねに帆かけてそ行

孤屋

師を友に橋をへたゝる花盛

其角

幸ます公をまねく初梅

嵐雪

補遺、清濁の問題につき、棚町知弥氏よりカ、ヤクは近松ではすべて清音となつており、それは藤井博士の全集の序文に指摘があるとの御教示を賜つた。従つて、現在のところ元祿頃にはカ、ヤクの例がないのではないかという推定はかなり確実性があるようである。又「細道」のカ、ヤクは清音のままにして差支えないことは云う迄もない。尙、氏はムツマシ・ソ、クにつき清濁両様の表記の近松作品中に存することを指摘された。棚町氏に深謝したい。

(本学専任講師)

(四八頁よりつづく)

追加八句

炉路入や衣にすれる松桜

勝政

うら付草履雪消る跡

友淨

鶯に手斧つかひの声添て

慶閑

とき舟よする岸の村竹

栄親

おも見せ小見せ通ふ鹿の音

可敬

水茶屋に幾年月の影すみて

公木

遊山人立盤昌の秋

素敬

大坂高滝以仙興行

益乘

延室五

已霜月吉日

深江屋

太郎兵衛板行

四十六才